

論 文

經濟と政治との関連の問題（五）

——いわゆる「トロツキズム」の性格規定——

山 本 二 三 丸

十七

〔ロシア社会民主労働党の綱領草案の作成〕

ロシア国内の労働運動とこれに結びついた革命運動との成長によって、分散して活動している諸組織を一つの社会民主党に統合し組織しなければならないという思想が一八九〇年代の終りに成熟してきて、一八九七年、キエフの「労働者階級解放闘争同盟」の決議により全ロシア的な非合法機関紙『ラボーチャヤ・ガゼータ』が発行され、ついで、翌一八九八年三月、ミンスクでロシア社会民主労働党第一回大会が開かれた。この大会に出席したのは、ペテルブルグ、モスクワ、キエフ、エカテリノスラフの各「闘争同盟」（各一人づつ）、キエフの『ラボーチャヤ・ガゼータ』

グループ（二人）およびブンド（ユダヤ人労働者総同盟、三人）の代表者（計九人）であった（レーニンは、シベリア流刑中のため欠席）。大会は、中央委員会を選出し、『ラボーチャヤ・ガゼータ』を党の公式の機関紙として承認し、「在外ロシア社会民主主義者同盟」を党の在外機関として公認し、大会の名で『宣言』を発表した。この『宣言』は、「政治的自由の獲得」を「党のもっとも重要な当面の任務」として規定したが、労働者階級の「政治権力奪取」の任務や、「指導権」の問題、「同盟者」の問題などについてまったくふれることがなく、きわめて不十分なものであった。しかし、ロシア社会民主労働党の創立を宣言したという点で大きな革命的宣伝の役割をはたしたものであり、またこの大会そのものは、ロシアにおける労働者党の設立の事業においてうたがいのなく重要な歴史的意義をもったのである。残念ながら、まもなく大会参加全員は逮捕され、『ラボーチャヤ・ガゼータ』印刷所は破壊され、諸都市で約五〇〇人の社会民主主義者が検挙され、組織は壊滅的打撃をうけた。このため、組織上の統一を達成することができず、諸組織の活動はばらばらのままで、統一した方針もなく、党の綱領や規約もないために、組織に参加した小ブルジョア層の影響もあって、各地方組織内の思想的混乱をもひきおこし、日和見主義的潮流——「経済主義」——を強める結果をまねくにいたった。この日和見主義的潮流とたたかってこれを革命陣営から徹底的に放逐するという重大な任務は、レーニンの肩の上にかかってきた。そのために、レーニンは、一方で、ロシア社会民主労働党の真に革命的な綱領をつくりあげるために奮闘をつづけ、また他方において、経済主義のさまざまな現われをとりあげ、これに仮借ない論駁を加えるための理論闘争をおしすすめた。（これらの闘争は、一九〇〇年レーニンの手によって創刊された全ロシア的非法法機関紙『イスクラ』の刊行によって、いちだんと高い段階にひきあげられることになるが、この点については、経済主義との闘争について述べるさいにふれることにしよう）。われわれは、まず、レーニ

ンの作成した綱領草案について、そのもっとも重要とおもわれる基本的な個所をいくつかとりあげてみておくことにしよう。

一九〇〇年までにレーニンの作成した綱領草案で今日われわれが入手できるものとしては、『社会民主党綱領草案と解説』、『綱領草案』は、ペテルブルクの未決監獄のなかで一八九五年に、『綱領の解説』は、同じ獄内で一八九六年に、レーニンによって書かれた)『われわれの綱領』(一八九七年に、『ラボーチャヤ、ガゼータ』に載せるために、シベリア流刑地で書かれた)および『わが党の綱領草案』(一八九九年、シベリア流刑地で作成)の三つがあるが、もっとも重要なものは、いうまでもなく最後の『わが党の綱領草案』である。はじめの二つは、最後の草案の作成のための準備的な労作、いわばその下書きにあたるものであり、この第三においては、はじめて、党綱領の全面的な基礎づけが与えられたのであって、のちに第二回党大会によって採択されたロシア社会民主労働党の綱領の基本はすでにここに明確に規定されているのである。それゆえ、第一および第二については、簡単な注記をつけておくにとどめ、第三のものについて必要な検討を加えることが、当面もっとも適当とおもわれる。

(61) 第一の『社会民主党綱領草案』は、『基本的な見解』を述べている「第一の部分」(A)、『党の任務』を述べている「第二の部分」(B)および「党の実践的要求」を述べている「第三の部分」(C、D、E)から成り立っている。それらのうちで、当面とくに重要な意義をもっているとおもわれる個所をつぎに抜粋してかかげておこう。

(Aの4)「資本家階級にたいする労働者階級のこの闘争は、他人の労働によって生活しているすべての階級にたいする、また、あらゆる搾取にたいする闘争である。この闘争は、政治権力が労働者階級の手にうつり、すべての土地、道具、機械、鉱山が、社会主義的生産の組織のために、全社会の手にひきわたされるとき、はじめて終わることができる。……」(全集第四版、第二巻、七九—八〇ページ、傍点—山本)。

(Aの6)「自己解放のためのロシアの労働者階級の闘争上の主要な障害は、無制限な専制政府と、なんびとにたいしても責任を負わないその官吏とである。この政府は、地主と資本家の特権にもとづき、また彼らの利益に奉仕することにもとづいて、下層の諸身分を完全な無権利の状態にひきとどめ、そうすることによって労働者の運動を束縛し、全人民の発展を阻止している。だから、自己解放のためのロシアの労働者階級の闘争は、必然的に専制政府の無制限の権力にたいする闘争をよびおこすのである」(前出、八〇ページ)。

(Bの1)「ロシア社会民主党は、労働者の階級的自覚を発達させ、彼らの組織化に協力し、闘争の任務と目標とを指示することによって、ロシアの労働者階級のこの闘争を援助することを、自分の任務として宣言する」(前出、八〇ページ)。

(Bの2)「自己解放のためのロシアの労働者階級の闘争は政治闘争であって、その第一の任務は政治的自由を獲得することである」(前出、八〇ページ)。

(Bの3)「だから、ロシア社会民主党は、労働運動から分離することなしに、専制政府の無制限の権力に反対し、特権的な地主貴族の階級に反対し、また闘争の自由を拘束する農奴制と身分制のすべての残存物に反対するあらゆる社会運動を支持するであろう」(前出、八〇ページ)。

(E)「農民のために、ロシア社会民主党は、つぎのことを要求する。

1、土地買取賦払金を廃止し、支払いずみの買取金を農民に補償すること。国庫は余分に払いこまれた金額を農民に返還すること。

2、一八六一年に農民から切り取られた土地を彼らに返還すること」(前出、八二ページ)。

『綱領の解説』の中から。

「……労働者の階級的自覚とは、労働者が、自分の地位を改善し、自分の解放をかちとる唯一の手段は、大工場によってつくられた資本家および工場主の階級にたいする闘争のうちにあることを、理解することである。さらに、労働者の自覚とは、ある一国の全労働者の利害は同一で一致しており、彼らの全体は社会の他のすべての階級と別個の一つの階級をなしているということ、を、理解することを意味している。最後に、労働者の階級的自覚とは、自分の目的を達成するためには労働者は、地主と資本家が国政にたいする影響力をすでにかちとり、いまなおかちとりつづけているのと同じように、彼らもまた国政にたいする影響力をかちとらなければならないということを、労働者が理解することを意味している」(前出、九六ページ、

傍点―山本。

『われわれの綱領』から。

「われわれは完全にマルクスの理論の基盤の上に立っている。この理論こそ、はじめて社会主義を空想から科学にかえ、この科学の基礎をうちたて、また、この科学をさらに発展させそれをすべての細目にわたって仕上げるにあたつて、いかなる道をすすむべきかを指し示したものである。それは、労働者の雇傭、労働力の購買が、ひとにぎりの資本家、土地、工場、鉱山、等々の所有者による数百万の無産の人民の奴隷化をいかに隠蔽しているかを明らかにすることによって、近代資本主義経済の本質を暴露した。それは近代資本主義の全発展が、いかに強大な生産による小生産の駆逐をめざしてすすんでいるか、社会の社会主義的組織を可能かつ必然なものにする諸条件を創りだしているかを、指し示した。それは根を張った慣習や、政治的陰謀や、こみいった法律や、手のこんだ学説の覆いの下に、階級闘争を、あらゆる種類の有産階級にたいする無産の大衆の、いっさいの無産者の先頭に立つプロレタリアートの闘争を、見ることを教えた。それは、革命的社會主義黨の眞実の任務を明らかにした。その任務とは、社会の改造の計画をつくりだすことでも、資本家や資本家にべここする手合たちに労働者の状態の改善を説教することでも、謀叛を組織することでもなく、プロレタリアートによる政治権力の掌握と社會主義社會の組織とを、その終局の目標とするプロレタリアートの階級闘争を組織し、これを指導すること、これである」(全集第四版、第四卷、一九〇―一九一ページ、傍点レーニン)。

「……………すべての社會主義者を統合するところの、かれらがそこからかれらのいっさいの確信を汲みとるところの、そして、彼らがそれをかれらの闘争方法と活動様式に適用するところの、革命的理論がないならば、強固な社會主義黨は存在しえない。……………」

すべての社會民主主義者に共通な綱領をロシアに適用するばあいには生じてくる主要な問題は、どういうものか？　すでに述べたように、この綱領の核心は、プロレタリアートの階級闘争を組織し、そして、プロレタリアートによる政治権力の獲得と社會主義社會の組織とをその終局の目標とするこの闘争を指導することにある。プロレタリアートの階級闘争は、經濟闘争(労働者の状態の改善のために個々の資本家または個々の資本家グループにたいしておこなう闘争)と政治闘争(人民の権利の拡大のため、すなわち民主主義のために、またプロレタリアートの政治権力の拡大のために政府にたいしておこなう闘争)

とにわかれる。ロシアの一部の社会民主主義者（おそらく、この部類に、新聞『ラボーチャ・ムイスリ』を出している連中ははいであろう）は、經濟闘争のほうが比べものにならないほどより重要であると考えて、政治闘争を多少とも遠い将来に延ばしているようである。このような意見は、まったくまちがっている。……しかし、經濟闘争のために政治闘争を忘れることは、世界社会民主主義派の根本命題にそむくことであり、労働運動の全歴史が教えていることを忘れることであろう。ブルジョアジーとこれに奉仕する政府との熱狂的な味方が、労働者の純經濟的な組合を組織して、それによって労働者を政治から、社会主義からそらせようと試みたことは、一度や二度ではない。……資本家にたいするどのストライキも、軍隊と警察を労働者にさしむける結果になる。あらゆる經濟闘争は、必然的に政治闘争に転化する。そして、社会民主主義派は、この一方をも他方をも、切りはなしえないように結びつけて、プロレタリアートの単一の階級闘争としなければならない。このような闘争の第一の主要な目的は、政治的権利の獲得、政治的自由の獲得でなければならない。……」（前出、一九一—一九三ページ、傍点レーニン）。

この最後の引用中に出てくる新聞『ラボーチャ・ムイスリ』は、『經濟主義者』の拠りどころとなっている新聞である。この新聞に発表された代表的な「經濟主義」的主張にたいして、レーニンがどんなに仮借するところなく批判し、たたかったかは、つぎの「經濟主義にたいする闘争」の項の中で見られるとおりである。

『わが党の綱領草案』の冒頭において、レーニンはまず、「綱領にたいするロシアの社会民主主義者の需要はほんとうに緊切なものであるのか、どうか？」という「問題」を出して、「いまこのときに綱領を作成する特別の必要はなく、緊急の問題はむしろ地方の組織を發展させ強化し、煽動と文書配達をもっとしっかり組織することだ」という、ロシア国内で活動している「同志たち」の意見をひきあいだして、これについて「われわれはこうした意見には同意しない」という考えを述べ、綱領の作成が「緊急の必要」となっていることを、つぎのように説明している。

（47） この『綱領草案』の内容を正しく理解する上できわめて適切な参考になるのは、一八九七年末同じく流刑地で書かれた論文『ロシア社会民主主義者の任務』である。この論文の基本的な内容は、さきにペテルブルグ「労働者階級解放闘争同盟」の歴史的作用について説明したさい、明らかにされた。ついて参照されたい（本誌、前号、一五五—一六〇ページ）。

「一八九八年春「ロシア社会民主労働党」が創立され、この党がごく近い将来に党綱領を作成するというその意向を声明したことは、綱領の要求がまさしく運動そのものの必要から生まれてきたことを、一目瞭然と証明したものであった。現在では、われわれの運動の緊要な問題は、以前のばらばらな「手工業的な」活動を発展させることではもはやなく、団結させること、組織化することである。綱領は、このような一步を踏みだすために必要である。綱領は、われわれの基本的な見解を定式化し、われわれの当面の政治的任務を正確に、さだめ、煽動活動の範囲をきめるべきとし、迫った諸要求を示し、煽動活動に統一性をあたえ、煽動活動を広めまた深め、煽動を小さな、ばらばらの要求のための部分的、断片的な煽動から、社会民主主義的な諸要求の総体のための煽動へ高めなければならない。いまや社会民主主義的活動が、すでにインテリゲンツィア社会民主主義者と自覚した労働者の双方の、かなり広範な範囲を奮い立たせているときには、綱領によって彼らのあいだの結合をかため、そうすることによって彼らのすべてに、今後の、いっそう広範な活動のための堅固な土台を与えることが、緊急の必要である。最後に、ロシアの世論は、ロシアの社会民主主義者の真の任務と活動方法について、きわめてひどい思いちがいをしていることがよくしばしばあるという理由からしても、綱領はやはり緊急に必要である。こうした思いちがいは、一部はわが国の生活の政治的沈滞の泥沼に自然に生まれてくるものであり、一部は社会民主主義派の反対者たちによって人為的に生みだされている。いずれにしても、この事実を考慮に入れなければならない。労働運動は、社会主義および政治闘争と融合して、党を結成しなければならぬのであって、この党は、もしロシア社会のすべての民主主義的分子の先頭に立とうと欲するならば、すべてこれらの誤解を消散させてしまうであろう」（全集第四版、第四卷、二〇九—二一〇ページ、傍点—山本）。

地方の小組組織がばらばらに「手工業的な」活動をしていた初期の段階から運動が發展をとげ、いまやすべての社会

民主主義者と先進的労働者を党に統合し、組織化することが当面の緊急の課題となつてゐるときには、綱領は無条件に、緊急に必要なものである。それは、党の基本的な見解を定式化したものであり、当面の政治的任務を正確に規定し、さらに当面の具体的・実践的諸要求を規定したものであつて、これなしには、社会民主主義者をただしく統合することもできないし、党活動を統一的に、一貫した方向をもつて展開することもできない。それは、前衛党にとつての、いわば心樁である。それなしには、党としての活動はおろか、党組織そのものの存在もおぼつかないものである。それゆえ、ペテルブルグ「労働者階級解放闘争同盟」をいち早く組織して社会民主主義的活動を開始したレーニンが、各地に「闘争同盟」になつた労働者運動組織があいついでつくりられ、全国的に運動が高まつてくるという事態を前にして、全国的な党組織の設立を当面の課題としてとらえ、はやくも一八九五年末に『綱領草案』を書きあげ、さらに一八九七年流刑地において『ロシア社会民主主義者の任務』と題する綱領的論文をものし、その二年後同じく流刑地にありながら、大著『ロシアにおける資本主義の發展』とならんで、ここにあげた『わが党の綱領草案』をつくりあげてゐるのは、彼レーニンがまことに傑出した、眞の革命党指導者であることを動かしがたく実証するものである。⁽⁶³⁾

(63) 綱領の必要を感じることもなく、綱領的文書の作成に寄与することのないような人物が、とうてい党指導者になる資格のないことは、いまさらいうまでもないことである。「トゥーシノの渡り者」などと比べものにならないほど、レーニンがマルクス主義を完全に体得した卓越した党指導者であつたということは、綱領の作成の過程における「論争」を積極的に歓迎してゐるという一事によつてもおしはかることができる。自分がやつと手に入れた「指導者」の地位が、「党内闘争」のなかで欠点や弱点をさらけだすことでフイになることがないように、これにしがみついて、「党内闘争」を上からおさえつけ、「第〇〇回総会決議」やら「〇〇〇方針」やらを金科玉条のようにふりまわして下の者をひきまわすことで精一杯という、そこらへ

んに見られる「党指導者」連中とはまったくちがって、レーニンは、「党内闘争」の積極的意義を極力強調し、その有名な著作『なにをなすべきか? われわれの運動の焦眉の問題』においても、その題字にそえて、一八五二年六月二十四日付のマルクスあてラッサールの手紙の中の一節——「……党内闘争こそが、党に力と生命をあたえる。党があいまい模糊としており、はっきりした相違点がばやけていることは、その党の弱さの最大の証拠である。党は、自己を純化することによって強くなる。……」——をかかげているほどであるが、綱領作成の過程での「党内闘争」の必要についても、つぎのように的確な説明をあたえているのである。

「つぎのように言つて反論する人があるかもしれない。社会民主主義者自身のあいだに意見の相違が発生し、論戦がはじまろうとしているので、いまはまだ綱領を作成するのに具合がわるい、と。わたしにはその逆であるようにおもわれる。つまり、これは綱領の必要性を裏づける、いま一つの論拠である。一方では、いったん論戦がはじまったからには、綱領草案審議のさいに、すべての見解と、見解のすべての色合いとが表明されて、綱領の審議が全面的なものになると、期待してよいのである。論戦は、ロシア社会民主主義者の隊列内でわれわれの運動の目的や、その当面の任務と戦術とについての広範な諸問題が活気をもって論じられていることを示しているが、こうした活気こそ、綱領草案の審議に必要なものである。他方では、論戦が無益なものにとどまったり、個人的な言いあいや墮したり、見解の混乱に導いたり、敵味方の混乱に導いたりしないようにするために、この論戦のうちに綱領の問題をもちこむことが、無条件に必要である。論戦が、意見の相違は本来どこにあるのか、それはどれだけ深いものなのか、それは事の本質にふれた意見の相違なのか、それとも部分的な問題での意見の相違なのか、これらの意見の相違は一つの党の隊列内で共同で活動することを妨げるものなのか、そうでないかを、説明するとき、そのときにはじめて論戦は利益をもたらずであらう。綱領問題を論戦のうちにもちこむことだけが——論戦の当事者が自身の綱領的な見解を明確に声明することだけが、緊急に解答を必要としているこれらの問題のすべてに解答をあたえることができる。もちろん、党の共通の綱領の作成は、けつしてあらゆる論戦をおわらせるはずのものではない。だがそれは、われわれの運動の性格、目的および任務についての基本的見解をしつかりと確立するであらう。そして、これらの見解は、部分的問題についてはその黨員のあいだに部分的な意見の相違があるにもかかわらず、結束した、単一の戦う党の旗印として、役立つべきものである」(前出、二一〇—二一一ページ、傍点—レーニン)。

以上の「まえおき」のちに、レーニンは「本題」にうつり、まず「労働解放」団⁽⁶⁴⁾によって一八八五年に出版された『ロシア社会民主主義者の綱領草案』をとりあげ、それがきわめてすぐれた「模範的なもの」のひとつであることを説明し、それに必要な「変更」または「補足」を加えることによって、「在外革命家の一グループの綱領」をどのようにして「ロシアの社会民主労働党の綱領」にたたくつくりかえるべきかを、あきらかにしている。つぎにまず、「労働解放」団の『綱領草案』についてのレーニンの評価からみていくことにしよう。

(64) レーニンは、ここで、「労働解放」団について、それが、「ロシア社会民主主義派をはじめ創りだし、その理論的・実践的發展のためにあのように多くの貢献をはたした」ものであって、「猶予なくロシアの社会民主主義運動の要求にこたえた」ものであること、そのことを示すものがはかならぬ一八八五年の『ロシア社会民主主義者の綱領草案』であると、明示している。ロシア社会民主主義派の一方の「旗頭」をもって自ら任じている彼トロツキーが、ことさら『ロシア社会民主主義派の發展諸傾向』という大論説をドイツ社会民主党の機関誌に大々的に発表しながら、その論説のなかで、この「労働解放」団についてひと言もしゃべらないばかりか、プレハーノフ、レーニンたちを十把ひとからげにして、マルクス主義を歪曲し、労働者を勝手に引きまわすただの「社会主義的インテリゲンツィア」どもだとして、かれらにたいして「労働者」大衆をけいかけ、いるという事実^{は、}、いったい、どのように説明されるべきであろうか？ プレハーノフ、レーニンが当時徹底的にその粉碎につとめたのは、「ロシア社会民主主義派」内部の小ブルの日和見主義分子、すなわち、経済主義者たちであって、さきにあげた党にかんするトロツキー自身の考え方の6は、まさしく、経済主義者の考え方と瓜二つであり、しかも解党主義者の主張とも完全に合致するものである。

「この草案はほとんど一五年前に出版されたものであるにもかかわらず、われわれの意見では、大体においてその課題をまったく満足のいくように解決しており、現代の社会民主主義理論の水準に立っている。この草案には、ロシアにおいて社会主義のための自主的な闘士となることのできる唯一の階級、「産業プロレタリアート」が、正確に指示

されており、この階級がたてなければならぬ目的、すなわち、「すべての生産手段と生産物資を社会的所有にうつすこと」、「商品生産の排除」、「商品生産を社会的生産の新しい制度で置きかえること」——「共產主義革命」が指示されており、「社会関係の改造の不可避的な予備条件」である「労働者階級による政治権力の奪取」が指示されており、プロレタリアートの国際連帯と、「種々ちがった国家の社会民主主義者の綱領には、それぞれの国家の社会的諸条件に応じた多様性の要素」が必要なが指示されており、「勤労大衆が、発展していく資本主義と寿命がつきかけようとしている家父長制経済との二重のくびきのもとにおかれている」ロシアの特殊性が指示されており、ロシアの革命運動と、新しい産業プロレタリアートの階級——いつそう感受性に富み、可動的で、発達した階級——の創出（発展していく資本主義の力による）の過程との結びつきが指示されており、「革命的労働者党」の結成の必要と、この党の「第一の政治的任務」である、「絶対主義の打倒」とが指示されており、「政治闘争の手段」が指示されており、この政治闘争の基本的要求がかかげられている。

綱領のこれらの要素は、みな、われわれの意見では、社会民主労働党の綱領にまったくなくてはならないものである。それらはみな、それいらい社会主義理論の発展を通じて、すべての国の労働運動の発展を通じて、またとくにロシアの社会思想とロシアの労働運動との発展を通じて、ますます新しい確証をあたえられてきた諸命題を提出している。われわれの意見では、ロシアの社会民主主義者は、以上の点を考慮して、ロシア社会民主労働党の綱領の基礎に「労働解放」団の草案をおくことができるし、またおかねばならない。この草案はただ構文上の部分的な変更、修正、補足を必要としているだけである」（前出、二二—二三ページ、傍点およびゴシック体——山本）。

では、「必要な部分的変更」とは、どのようなものであるか？ これについて、レーニンは、

「まず第一に、いうまでもないことだが、綱領の構成の性格がいくらか変更されなければならない。一八八五年には、これは在外革命家の一グループの綱領であつて、これらの革命家は、唯一つの成功を約束する運動發展の道を正しく規定することはできたが、その時にはロシア国内において多少とも広範で自立的な労働運動というものを彼らはまだ見なかった。一九〇〇年には、すでに一連のロシアの社会民主主義的諸組織によって創立された労働者党の綱領が問題となつていたのである。このために構文上の変更のほか、右に述べた相違からして、社会民主主義的労働運動の物質的および精神的諸条件を生みだす經濟的發展過程と、社会民主党がそれを組織することを自分の任務としているプロレタリアートの階級闘争とを、第一位に立て、いっそう強力に強調するといふ必要が生じてくる。」

と述べて、右の二点を中心として、「われわれの綱領の原則的部分が満たさなければならない諸要求と、綱領のなかでできるだけ正確にまた鮮明に言いあらわさなければならない基本的命題とにたいするわれわれの見解」（前出、二二三ページ、傍点レーニン）を、つぎのように説明している（……は中略を示す）。

「ロシアの現代の經濟体制とその發展との基本的特徴の記述を綱領の主位におき（「労働解放」団の綱領のつぎの句を参照せよ——「ロシアでは、資本主義は農奴制度の廢止以来巨大な進歩をとげた。古い現物經濟制度は、商品生産に席をゆづりつつある」）、それにつづいて、資本主義の基本的傾向、すなわち、ブルジョアジーとプロレタリアートとへの国民の分裂、「貧困、抑圧、隸属、頽廢、搾取の増大」⁽⁶⁵⁾を概説すべきであろう。……………」

……………」「貧困の増大」の指示につづいて、プロレタリアートの階級闘争の特徴づけ——、この闘争の目的（すべての生産手段を社会的所有にうつし、資本主義的生産を社会主義的生産におきかえること）の指示、——労働運動の國際的性格の指示——、階級闘争の政治的性格とそのもつとも近い目標（政治的自由の獲得）の指示がなされなければ

ばならない。政治的自由の獲得をめざす専制反対の闘争を労働者党の第一の政治的任務として認めることは、とくに必要であるが、この任務を説明するためには、われわれの意見では、現代ロシアの絶対主義の階級的品格を特徴づけ、また、労働者階級の利益のためだけでなく、社会的発展全体のためにもこの絶対主義を打倒する必要があることを、特徴づけなければならない。こういう指示は、理論上も必要であり——なぜならば、マルクス主義の基本思想の観点からみれば、社会発展の利益はプロレタリアートの利益より高く、労働運動全体の利益は、労働者の個々の層または運動の個々の瞬間の利益より高いからである——、また実践上も、宣伝、煽動、組織から成り立つ社会民主党の多様な活動の全体がそこに集約され、そのまわりに結集されなければならない中心点を特徴づけるために必要である。このほかに、さらに、つぎの点を指摘することに綱領の特別の一節をあてなければならないだろうと、われわれにはおもわれる。すなわち、社会民主労働党は、絶対主義に反対するいっさいの革命運動を支持すること、官吏の後見とえせ施し物により、わがドイツの同志たちが「答と菓子パン」と名づけたデマ的政策によって人民の政治的意識を墮落させ、ほかそうとする専制政府のあらゆる企てに反対して闘争することを、自分の任務としている……」。

(前出、二二三—二二六ページ、傍点—レーニン)。

(65) この『資本論』第一巻第二十四章第七節「資本制的蓄積の歴史的傾向」の中の有名なマルクスの言葉について、レーニンは、それが、「資本主義の傾向の特徴づけ」という意味で正しいだけでなく、「社会的貧困の増大」つまり、「プロレタリアートの状態とブルジョアジーの生活水準とのあいだの不照応の増大の指示」という意味でも正しいことがカウツキーによって示されたことを指摘し、さらに、それが、資本主義の「境界地帯」(すなわち、資本主義がようやく発生しつつあり、前資本主義的諸制度につきあたっているような諸国や国民経済諸部門)で貧困の増大が、しかも「社会的貧困」だけでなく、飢餓と餓死とまでもふくめたもつともおそろしい肉体的貧困の増大が、大量的な規模になっているという意味でも正しいと述べ、この

ことはどこよりもよくロシアにあてはまるのでぜひとも綱領の中に入れるべきだと、つぎのように説明している。帝國主義諸国の修正主義「前衛」諸党が、広範な下層労働者（不熟練工、臨時工、下請工）や後進諸国の勤労人民の搾取・抑圧・飢餓を黙認しながら「平和・民主・恵まれた生活」の空手形で勤労大衆を釣ることに狂奔している今日、レーニンのこの説明はまさに的を射たものと考えられるので、つぎにこれを引用しておこう。

「第一に、これらの言葉は、資本主義の基本的・本質的な特質をまったく正当に特徴づけているし、また、まさにわれわれの眼前におこなわれている過程、ロシアに労働運動と社会主義とを生みだしている主要条件の一つである過程を、特徴づけているからである。第二に、これらの言葉は、労働者大衆をもっとも抑圧するが、またもっとも彼らを憤激させるあまたの現象（失業、低賃銀、栄養不良、飢餓、資本の苛酷な規律、売淫、召使数の増加など）を要約している点で、大きな煽動材料を与えているからである。第三に、資本主義の有害な作用や、労働者の憤激の必然性、不可避免性を、このように正確に特徴づけることによって、われわれは、中途半端な人々、つまり、プロレタリアートに「同情」し、プロレタリアートのために「改良」を要求しながら、プロレタリアートとブルジョアジーとのあいだ、専制政府と革命家とのあいだに「中庸の立場」を占めようとつとめている人々から、自分を区画するからである。ところで、政治的自由と社会主義のための断固たる、不退転の闘争をおこなう、単一の、結束した労働者党を指すなら、これらの人々から自分を区画することは、現在においてとくに必要である」（前出、二一四ページ、傍点—山本）。

ついで、レーニンは、綱領の原則的部分について「労働解放」団の綱領草案に加えるべき変更と修正を簡単に説明したのち、綱領の実践的部分にうつり、（一）一般民主主義的改革の諸要求、（二）労働者保護方策の諸要求、（三）農民の利益をはかる方策の諸要求、の三部について必要な補足を述べているが、とくに（三）の農民問題にかんする諸要求については、——「労働解放」団の綱領草案にはただ一つの要求しかかけられていないので——ロシアにおける農民問題の特殊性についてたちいった考察をくわえ、つぎのような主張を明確にうちだしている。

「ロシアの社会民主主義者は、たとえ（本論の筆者のように）資本主義社会における小規模所有または小経営を保護

または維持することの断固たる反対者の仲間であつても、つまり、農業問題においてもまた（本論の筆者のように）、こんにちあらゆるブルジョアや日和見主義者が好んで「教条主義者」とか「正統派」とかいって悪罵しているようなマルクス主義者の味方であつても、自分の信念をすこしもかえずに、むしろ逆に、まさにこの信念にもとづいて、つぎのことに賛成することができるし、また賛成しなければならないのである。それは、農民（ここにいう農民は、小所有者または小経営主の階級としての農民ではけつしてない）が一般に農奴制の残存物に反対し、とくに絶対主義に反対して革命的に闘争する能力をもっているかぎりには、労働者党はこの農民を支持することを自分の旗印に書く、ということである」（前出、二二—二三ページ、傍点—レーニン）。

そして、レーニンは農民問題にかんする要求として五つの項目を挙げてこれに説明を加え、これらの諸要求の意義をつぎのように明示する。

「全体として、われわれの提案する諸要求は、われわれの意見では、つぎの二つの基本目的に帰着する。（一）農村におけるいっさいの前資本主義的・農奴制的諸制度と諸関係とを廃絶すること。（二）農村の階級闘争に、いっそう公然かつ意識的な性格を付与すること。まさにこれらの原則こそ、ロシアにおける社会民主主義的な「農業綱領」のための指針とならなければならないと、われわれにはおもえる。——農村の階級闘争をなしくずしにしようという、ロシアにひじょうにおびただしく見られる志向から、断固として自分を区画しなければならない。支配的な自由主義的ナロードニキ派の傾向は、まさしくこういう性格をもっているが、われわれは、この傾向を断固として排撃しながらも、ナロードニキ主義の革命的内容をそれから分離させなければならないということを、忘れてはならない。……ロシアの農村では現在、階級闘争のつぎの二つの基本的な形態がからみあっている。（一）特権的な地主に反対

し、農奴制の残存物に反対する農民の闘争。（二）発生しつつある農村プロレタリアートと農村ブルジョアジーとの闘争。社会民主主義者にとっては、もちろん、第二の闘争のほうがより重要な意義をもっているが、彼らは、第一の闘争が社会発展の利益に矛盾しないかぎり、ぜひともこの闘争をも支持しなければならない。農民問題がロシアの社会とロシアの革命運動でひじょうに大きな地位を占めてきたこと、またいまも占めていることは偶然ではない。この事實は、第一の闘争もまた大きな意義をたもちつつけていることの反映にすぎない」（前出、二三〇—二三二ページ、傍点—レーニン）。

およそ以上のような説明をしめくくって、レーニンは、「ロシア社会民主労働党の綱領の構成部分は、つぎのようなものでなければならない」として、つぎの十項目をあげて、右の論文を結んでいる。

「（一）ロシアの経済的發展の基本的性格をしめすこと。（二）資本主義の不可避免的結果、すなわち、労働者の貧困の増大とその憤激の増大をしめすこと。（三）プロレタリアートの階級闘争をわれわれの運動の基礎としてしめすこと。（四）社会民主主義的な労働運動の終局目標、この目標の実現のために政治権力をたたかうとするその志向、運動の国際的性格をしめすこと。（五）階級闘争の必然的な政治的性格をしめすこと。（六）ロシアの絶対主義は、人民の無権利と抑圧の条件となっている点で、また搾取者を庇護している点で、労働運動の主要な妨害物であり、したがって、政治的自由の獲得——それは社会的發展全体のためにも必要である——こそ党の当面の政治的任務をなしていることを、しめすこと。（七）党は、絶対主義に反対して闘争するすべての党と住民層を支持するであろうし、わが国の政府のデマ的な詭計にたいして戦うであろうということを、しめすこと。（八）基本的な民主主義的諸要求と、つぎに（九）労働者階級のための諸要求、（一〇）農民のための諸要求を列挙し、これらの要求の一般的

性格を説明すること」(前出、二二二—二三三ページ)。

さきにペテルブルグ「労働者階級解放闘争同盟」の組織と活動について述べたさい見たように、十九世紀末ロシアの労働運動は、その西部地区、ペテルブルグ、モスクワ、キエフその他の都市の労働者の社会民主主義組織の設立と活動をもって全国的規模にひろがり、一八九八年春のロシア社会民主労働党(第一回大会)の成立をみるまでに成長した。しかし、この大会に参加した代表者全員とその他のこれに関係した社会民主主義者はほとんどすべてツァーリ政府によって逮捕され、党組織の芽生えは無残につみとられ、これによってロシア社会民主主義派は、再び個々の地方組織の細分された活動へおしかえされるという事態においこまれた。こうした事態は、ロシア社会民主主義派の中にすでに生じていた日和見主義的要素、すなわち経済主義の要素を強めるという作用をおよぼした。経済主義者は、ツァーリ政府の強力な弾圧を招くような政治闘争はやめてもっぱら「最小抵抗線」にしたがって経済闘争をおこない、個々の地方の個々の企業における労働者の経済的地位の改善をかちとることに活動の中心をおくことを主張した。これは、プロレタリアートの階級闘争を雇主と労働者との闘争におきかえるもの、意識的革命的闘争を自然発生的闘争におきかえるものであり、社会民主主義にたいする直接の裏切りにはかならない。社会民主主義派の任務は、資本家にたいする労働者の闘争を、資本家階級全体にたいする、また、この階級を支持する政府にたいする闘争に高め、階級闘争を組織することに、つまり政治闘争に転化させることにこそある。この「社会主義と労働運動との結合」を達成しえたとき、はじめて社会民主主義派は真実の社会民主主義派となる。そのためには、労働者の組織化および労働者のあいだでの宣伝と煽動とを手段として、抑圧者にたいする彼らの自然発生的な闘争をば階級全体の闘争に高め、特定の政治的・社会主義的理想をめざす特定の政治的党の闘争に転化させなければならない。ロシアの社会

民主主義派は地方的組織と地方的活動の段階からこれを結集した全国的組織と単一の党の活動に移るべき時期に当面していたのである。だが、これまでの地方的な「手工業的な」活動を統合し、団結させ、組織化するためには、なによりもまず確固たる綱領をもたなければならぬ。綱領こそは、まさしく、革命的党の基本的な見解を定式化し、その当面の政治的任務を正確にさだめ、当面の煽動活動の方向と範圍をさだめ、かくして広範な党活動のための堅固な土台を提供するものであって、これなしには、党は眞の革命的前衛組織として不可欠の心棒を欠くものとなり、それこそトロツキーのいう「理論的に同意見の人々の閉鎖的な団体として、労働運動のすべての形態の上に立つところの指揮団体」（Ⅳの②）としてかろうじて名目的にのみ存在をたもつだけのものとなるであらう。

それゆえ、レーニンが、マルクス主義者としてたちあらわれるやいなや、一方においてマルクス主義理論の宣伝とそれのロシアの現実への適用および發展をおしすすめることによって、これまで支配的であつたナロードニキ主義および「合法マルクス主義」との理論闘争を通じて理論戦線でのマルクス主義理論の指導権^{ヘゲモニー}の確立を達成すると同時に、他方において、労働者組織および労働運動そのものの中に入ってこれを指導し、「社会主義と労働運動との結合」のために奮闘し、「労働運動に立脚し、プロレタリアートの階級闘争、すなわち資本と絶対主義政府とにたいする闘争を指導し、社会主義的闘争と民主主義的闘争とをプロレタリアートの単一不可分の階級闘争に結合すること自体から自分の力を汲み出している、革命党の萌芽」とレーニン自身がかつて呼んでいるペテルブルグ「労働者階級解放闘争同盟」を創立してこれを指導し、全国各地に「革命党の萌芽」を植えつけることをなした時点において、いまや運動が新たな局面をむかえていること、全国組織の結成、革命党の設立が当面の緊急の課題となつてゐることをいちはやく見てとり、そのために不可欠の前提要件としての党綱領、および全国的党機関紙の意義を強く前面におしだし

て、かれ自身綱領草案を作成し、また全国的機関紙発行の準備をすめたことは、真にすぐれた革命的指導者としての資質と能力をいかに発揮したものであって、この上もなく模範的なものといわなければならない。

ところで、レーニンやブレハーノフの声望をけおとして、彼自身最高指導者の地位を占めようという野望のもとに、ドイツ社会民主党の機関誌にその得意とする「ペロ」を駆使して世紀の大論説を発表した「革命家」トロツキーは、いったい、どんな「綱領草案」をつくりあげているであろうか？ いやしくも、革命的前衛組織である党を指導しているというほどの人物で、党の基本的見解、その当面の政治的任務、その煽動活動の方向および範囲について、確固たる見識をもち、これを的確に定式化して提示することが、まったくできないというような、恥ずべき人間がまたあるだろうか？ ところが、彼トロツキーは、どんな綱領草案もつくりはしなかった。いや、つくることなどうていできなかった。もっと正確にいうならば、綱領が党建設にとって絶対に必要なものであるという、その基本的意義すら、ほんのこれっぽちも理解できなかったのである!! その証拠は、彼が発表した世紀の大論説のなかの、数々の目ざましい飾り文句である。彼は、レーニンやブレハーノフにむかって、「マルクス主義を歪曲した社会主義的インテリゲンツィア」の「理論的に同意見の人々の閉鎖的な団体」にすぎず、これらの「秘密グループ」は、「理論的な定式や政治的スローガン」をつくることだけしかせず、「一般的な綱領的な諸要求」ばかり労働者におしつけるもの、「労働者組織とは無関係の引き廻し団体」にすぎないのだ、という、非難、中傷、罵詈雑言を、けんめいに投げつけている。これらの非難、中傷は、トロツキー自身が「理論的な定式」や「政治的スローガン」および「一般的な綱領的要求」というものにまったくなんらの意義をみとめていないこと、これらのものに心を煩わすものを非難し軽蔑しているものであることを、このうえもなく明確に示している。だが、「理論的な定式」や「政治的なスローガン」および「一般的な綱領的諸要

求」の意義をみとめず、これらを極力排撃するということは、いったい、どういうことを意味するか？ それは、まさしく党が經濟闘争と政治闘争とを結合したところの、プロレタリアートの階級闘争を指導することを否定すること、マルクス主義の核心である「社会主義と労働運動との結合」をやぶりすて、個々の労働者の經濟状態の改善のみをめざす經濟闘争に党活動を限定すること、そして、党を、さまざまな——革命的なものから反革命的なものにいたるまでの——色合いの「理論」と「政治的主張」をもつ種々雑多の「社会民主主義者」の寄合世帯としての「党」組織につくりかえることを意味する。これは、まぎれもなく、「自然發生性への拜跪」であり、經濟主義的尻尾主義であり、党破壊をめざす解党主義的主張である。マルクス主義の宣伝につとめ、古い革命的理論と古い社会主義理論とを批判し、理論戦線でマルクス主義のヘゲモニーの確立をなしとげるとともに、「社会主義と労働運動との結合」をすすめる、そのために必要な「綱領草案」を作成したレーニンとブレハーノフを、そして、さらに、ペテルブルグ「闘争同盟」を中心として、「革命党の萌芽」の發展のために全力を傾けつつあったレーニンをとらえて、「労働者組織とは無縁の、社会主義的インテリゲンツィアの閉鎖的な団体」をなすものという悪口雑言を並べたてる当の本人は、どうかといえ、これはまたロシア国内の労働者組織とはまったく完全に無縁の、ウィーン『プラウダ』のまわりにくつついたほんの少数の野心的無理論的インテリ政治屋の集まりしか動かせないという態たらくである。この、国内労働者組織と完全に無縁の亡命インテリ・グループの親方が、「新しい党組織」なるものを提唱して、レーニンなどの真実の社会民主主義的指導者を放逐して、「非合法の党組織」を「合法的な大衆組織」につくりかえ、活動の重点をもっぱら「合法の大衆組織のなかでの日常的な運動の実質的指導」の上におくべきことを極力主張し、「理論的な定式や政治的スローガン」や「一般的な綱領的諸要求」のための活動を排撃すべきだと精力的に書き立てているの

は、彼自身が正真正銘の經濟主義者と惡名高い解黨主義者との、二つの要素のまことに美事な「統一」にござたまぜ（つまり「トゥーシノの渡り者」）を成す者であることを、動かしがたく実証するものといわなければならない。

ところで、彼トロツキーが黨建設にとつてもつとも緊要な綱領問題についてまったく否定的な見解しかもたなかったこと、綱領草案をひとつも書かなかつたし、また書きたくとも書くことができなかったという事實は、つぎの二つの事實と密接な関連があるものと考えなければならない。そのひとつは、彼トロツキーが、マルクス主義理論を十分正しく理解することはおろか、ほんのこれっぽっちも理解できなかったこと、したがってこれをロシアに正しく適用して、ロシアの現代の經濟体制とその發展との基本的特徴を正確に把握することも、これを的確に記述することもまったくできなかったものである、という事實である。ロシアの經濟的發展の基本的性格を正確にとらえないでは、綱領草案は考えることすら不可能である。いまひとつは、彼トロツキーが、ロシアの特殊性をただしく認識することができず、家父長制的・前資本主義的制度のあらゆる残存物にたいする闘争の意義を見失っていたこと、とりわけ、これによって、農民問題の重大な意義を見落した、という事實である。すなわち、彼は、ロシアの經濟的發展の基本的性格も、その特殊性をもとらえることができず、——つまり、ロシアの現実の經濟狀態の把握をこころがけず、また、したくともできず——ただただプロレタリア革命という、内容からっぽのかけ声だけで事をすましているのである。この第二点、すなわち、ロシアの特殊性を正しく分析し、その現実の階級關係、階級闘争のあり方を正確に把握することをあえてなおざりにしているということは、彼トロツキーが、眞実の革命的指導者としての資質にまったく欠けた、ただの煽動政治屋でしかないことをはっきりと示すものである。

亡命インテリ小集團の自称指導者とは根本的にちがって、眞実の革命的指導者、レーニンは、「社會主義と労働運

動との結合」を率先して指導し、「革命党の萌芽」を育てあげると同時に、社会民主主義的労働運動の物質的・精神的諸条件を生みだす經濟的發展過程を克明に解明する（大著、『ロシアにおける資本主義の發展』）と同時に、ロシアの特殊性に注目して、農民問題に重大な意義をまとめ、「ロシアの農民は、農奴制の残存物や絶対主義と革命的に闘争する能力をもっているだろうか？」という観点から問題を考察し、「もし労働者党が、農民のあいだにも存在している革命の分子を看過し、これらの分子を支持しないならば、党はマルクス主義の基本的遺訓に違反し、重大な政治的誤謬を犯すことになる」（前出、第四卷、二三三ページ、傍点―レーニン）という立場を堅持し、まことにすぐれた真の「農業綱領」をつくりあげ、一九〇五―一九〇七年の革命を通じて、この綱領の正しさを検証しえたものである。ロシアの特殊性、とりわけ農民問題の重大な意義を見失い、マルクス主義の基本的遺訓を忘れたような自称「指導者」トロツキーに、真の党綱領の意義のわからうはずはなく、したがって、彼の唱える「党建設の理論」なるものが、「党破壊の理論」、つまり、典型的な解党主義理論のひとつとならざるをえないのは、理の当然というべきである。こうして、彼が、ことさら外国党機関誌上をかりて大々的に書きたたレーニン誹謗の文字は、そのまま、彼自身の經濟主義者―解党主義者としての本質をみごとに暴露するだけの文字となっているのである。彼が得意とする「ペロ」は、ごらんのように、彼自身の下劣・醜惡な正体をさらしだすという、まことにすばらしい偉力を發揮するものとなっているのである！

一八九七年二月、シベリア流刑地への出発を前にして一時釈放されたレーニンが、ペテルブルグで、「闘争同盟」員たちとの集会の席上で、「青年組」同盟員たちの間に生じつつあった経済主義の現われを指摘して、これにたいしするとい批判をあたえた、ということはすでにさきにふれたとおりである。⁽⁶⁶⁾こうしたレーニンの批判や「労働解放」団の人々の批判、闘争にもかかわらず、労働運動の拡大につれて経済主義的潮流は、ロシア国内で無視することのできない勢力をもつようになり、はやくも一八九七年十月より経済主義者の新聞『ラボーチャ・ムイシリ』が発行されはじめ、また、一八九八年三月開かれたロシア社会民主労働党第一回大会で正式に党の在外機関として認められたジュネーヴの「在外ロシア社会民主主義者同盟」は、一八九四年「労働解放」団の提唱によって創立されていらいず、と「労働解放」団の指導のもとにおかれてその出版物の編集は団の手によっておこなわれてきたにもかかわらず、しだいに日和見主義的分子である「青年組」すなわち経済主義者たちによって支配されるようになり、ついは一八九八年十一月「同盟」第一回大会の席上「分裂」がはじまり、一九〇〇年四月「同盟」第二回大会で「労働解放」団は終局的に「同盟」から脱退し、独立の革命的組織「社会民主主義者」団を結成するにいたった。これにたいして、「同盟」をまんと掌握した経済主義者たちは「同盟」の機関誌として、一八九九年四月いらい、「ラボーチュエ・デーロ」を発行して革命的マルクス主義に背反する経済主義的思想の宣伝につとめることになったのである。経済主義にたいするレーニンの闘争は、国内の経済主義者（プロコボヴィチ、クスコヴァ、その他）のグループの作成した宣言——いわゆる『クレード』——にたいする批判をおこなった論文、『ロシア社会民主主義者の抗議』にはじまり、これにつづいて、『ラボーチャ・ムイシリ』の傾向にたいして徹底的批判を加えた論文、『ロシア社会民主主義派の、うちの、後退的傾向』、およびキエフ委員会によって作成された『プロフェシオン・ドゥ・フォア』を批判した論文、

『プロ、フェシオン・ドゥ・フ、オア』について、展開された。これらはいずれも一八九九年後半にシベリア流刑地において書かれたものである。

（66） 本誌第二十五卷第二号、一三九ページ、参照。なお、このことについては、レーニン自身が、著書『なにをなすべきか？』のなかで詳しい説明をあたえている。その第二章の（ロ）「自然発生性への拝跪。ラボーチャヤ・ムイスリ」の冒頭の一節を参照されたい（前出、第五卷、三五〇ページ）。

（67） ロシア社会民主労働党第一回大会で党の公式機関紙として承認された『ラボーチャヤ・ガゼータ』への発表を予定して、一八九九年流刑地で書かれた『諸論文』のうちのひとつ、『編集者クループへの手紙』のなかには、はやくも、経済主義者、日和見主義者にたいする闘争が緊急の課題となっているということが、つぎのように明確に指摘されている。

「諸君がわたしに書いてよこしているところでは、諸君は、『古い流派は強固である』と考えて、ベルンシュタイン主義とロシアにおけるその反映とにたいして論戦をおこなう特別の必要はないとおもっている。わたしは、この見解は、樂觀的にすぎると考える。ロシアの社会民主主義者の大多数は自分と意見が一致していると、ベルンシュタインが公けに声明したこと、青年組の在外ロシア社会民主主義者と『古い流派』の創始者でもあれば代表者でもありまたそのもっとも忠実な守護者でもある『労働解放』団とが分裂したこと、なにか新しい文句を吐き、『広範な』政治的任務に反対し、小さな仕事や手工業性をあがめたてまつり、『革命的理論』を卑俗にも皮肉ろうと『ラボーチャヤ・ムイスリ』が骨を折っていること（同紙、第七号『随想』、最後に、合法マルクス主義文献が完全に混乱状態にあること、この文献の代表者の多数が、ベルンシュタイン派のやっているいまの流行の『批判』に喜んで飛びつこうとする明瞭な志向をあらわしていること、——すべてこうしたことは、わたしの見るところでは、『古い流派』を復活させ、それを精力的に守りぬくことが、真に焦眉の問題であることを、明らかに示している。……………」

わたしは、『ラボーチャヤ・ムイスリ』に反対して公然と論戦をはじめなければならないとおもう。……………」（前出、第四卷、一八七—一八八ページ、傍点—レーニン、ゴシック体—山本）。

一九〇〇年一月流刑満期でヨーロッパ・ロシアに帰還したレーニンは、かねてからの全国的政治新聞『イスクラ』

の發行計画の実現にむかつて努力し、同じ年の十二月、ついに第一号をライプチヒで發行することができ、これよりずっと第五一号まで、つまり一九〇三年十月ブレハーフおよびその他のメンシェヴィキの占領した編集部によって第五二号以下が出される直前まで、この『イスクラ』を重要な拠点として、經濟主義にたいする精力的な闘争をくりひろげたのである。そして、こうした經濟主義にたいする批判と闘争を総括しつつ眞の革命党のイデオロギー的基礎をきづきあげたのがほかならぬ名著、『なにをなすべきか？ われわれの運動の焦眉の諸問題』（一九〇二年）である。この『なにをなすべきか？』は、經濟主義・日和見主義にたいする闘争において劃期的意義をもつ労作であるが、それにもかかわらず、党内の經濟主義的潮流はきわめて強固な根をはり、レーニンの提唱により『イスクラ』編集局によって準備された一九〇三年七月八月のロシア社会民主労働党第二回大会の席上において、革命的マルクス主義の立場を堅持するポリシェヴィキ派と、經濟主義的・日和見主義的立場を固執するメンシェヴィキ派との対立が公然化し、ついに分裂という最悪の事態を招くにいたつたのである。本節では、主としてはじめの二つの論文——『ロシア社会民主主義者の抗議』および『ロシア社会民主主義派の後退的傾向』——について、經濟主義にたいするレーニンの闘争がどのようなものであったかということを大づかみにとらえることとし、なお必要に応じてそのほかのものを若干の補注をくわえることにより、あわせて、經濟主義にかんするトロツキーの主張の性格を浮き彫り的にとらえることにしたいとかんがえる。

一八九九年、經濟主義者のグループの作成した宣言——いわゆる『クレード』に反対して書かれた『ロシア社会民主主義者の抗議』は、『（ロシアの）一地方の一七人からなる社会民主主義者の集會は、満場一致でつぎの決議を採用し、これを公表して全同志諸君の討議にゆだねることを決定した。』（全集第四版、第四卷、一五三ページ、ゴシック体お

よび傍点は原文のもの」という「まえおき」がつけられており、その本文はつぎのような書き出しではじめられている。「最近ロシアの社会民主主義者のあいだには、その創始者であり先進闘士である人々——すなわち「労働解放」団の団員たち——や、さらに九〇年代のロシアの労働者諸組織の社会民主主義的出版物によって宣明された、ロシア社会民主主義派の基本的諸原則からの背反がみとめられる。以下にかかげる『クレード』は、一部の「青年組の」ロシア社会民主主義者の基本的見解を表現するものとみるべきであつて、「新しい見解」を系統的に、明確に叙述しようとする試みである」（前出、一五三ページ）。

すなわち、この論文は、経済主義的見解の最初の明確な表明にたいして、レーニンがはじめて徹底的に断固たる批判を加え、これをロシア社会民主主義派の中から掃滅しようとして書かれたもので、それがきわめてはげしい調子の「摘発」であることは、表題そのものからしても十分うかがえる。論文は、右の書き出しにつづいて、「つぎにあるのが『クレード』の全文である」と述べて、これを一語あまさずかかげて、その内容をくわしく検討し、それがいかに、社会民主主義派の基本的原則にそむき、マルクス主義理論を歪曲し、革命的労働者党をブルジョア的改良党につくりかえようとするものであるかということを明らかにしている。つぎに、まず、『クレード』の主張の要点をかかげてみよう。

『クレード』の論法の特徴は、まず西欧での労働運動の簡単な記述をし、つぎにこれにたいしてロシアの特殊性をあげ、西欧での経験をロシアにあてはめるのは誤りであるといったやり方で、自説を「合理化」しようとするところにある。西欧について、『クレード』は、革命的政治闘争をやつて民主主義的制度を戦いとつたのは、ブルジョアジーと手工業者であつて、マニユファクチュア熟練労働者こそが社会民主主義諸党の中核となつたものであるが、工場

プロレタリアートはとうてい組織的運動をする能力はもっていない、という。マニファクチュア組織労働者と政治闘争の容易さという二つの基盤の上にマルクス主義は成長したものであって、それはまさに政治闘争が経済闘争に優越していた支配的実践の理論的表現にすぎない。労働運動の研究から引き出すことのできる基本法則は、最小抵抗線、ということである。西欧ではこの線にあたるものが政治活動であった。しかし、政治運動が壁にぶつかり、組織能力のない工場プロレタリアートの登場でベルンシュタイン主義が、「マルクス主義の危機」が生みだされた。いまや問題は、実践的活動の根本的な変更にある。とりわけ重要なことは、他の反政府諸党にたいする党の態度の変更であって、これまでの狭量なマルクス主義、社会の階級区分についてあまりに図式的な考え方をする原始マルクス主義は、民主的マルクス主義に席をゆづるであろうし、権力をめざす党の努力は、現状に適応した民主主義的方向に沿って現代社会を変更し、改革することを目標とする努力にかわらなければならない。かくして当然に、現瞬間の実践的諸要求にいままでよりもずっと大きいウェイトがおかれることになるであろう。——以上のような西欧の事態についての「記述」から『クレード』は、ロシアについてつぎのような「結論」をひきだす。すなわち、ロシアでは労働者勢力が弱く専制が弾力で弾圧がきびしいうえに、西欧のような組織的精神を労働者階級がもっていないので、最小抵抗線が政治活動の方向をさすことはけっしてない。経済闘争こそ最小抵抗線にかなうものである。ロシアの農村の飢餓と零落および労働者大衆の低い文化的水準を引上げることの困難を考えれば、ロシアにおける独立の労働者政党についての論議は、とうてい問題にはならない。ロシアのマルクス主義者の政治的知識は、他人のものをそのまま真似た図式として利用されているために、実践的にみて有害である。彼らは、歴史的条件のちがいを見失って、西欧流ではない、ロシアの条件のもとで適切かつ必要な、別個のマルクス主義が要求されていることをわきまえず、他のあら

ゆる非労働者のな社会層の急進的または自由主義的な反政府活動を、必要以上の輕蔑をもってあしらっている。ロシアのマルクス主義者にとつてのただ一つの路線は、プロレタリアートの經濟闘争に参加し、これを援助すること、そして、自由主義的な反政府活動に参加すること、これである。——このように述べて、『クレード』は、つぎのようなおためごかしの「説教」をもってその「結び」にかえている。——「もし階級的図式がロシアのインテリゲンツィアに生活(1?)への活潑な参加をさまたげて、彼らをいろいろの反政府サークルからあまりにも遠ざけるなら、そのことは、労働者階級がまだ政治的任務をかがけていない(1?) ためにやむをえず(1?) この労働者階級と提携することなしに(1?) 政治的諸形態のため(1?) の闘争(1?) をおこなっているすべての人にとって、重大な損失となるであろう。政治的課題についての觀念的論議(1?) のかげにかくされているロシアのインテリゲンツィア出身のマルクス主義者の政治的無邪氣さ(!!) は、彼らに痛棒をくらわせることになりかねない」(前出、一五六ページ、傍点、(1?) および(!!)——山本)。

(68) 「労働解放」団やロシア各地の「闘争同盟」のまわりに結集した革命的マルクス主義者をとらえて、「狭量なマルクス主義者」とか、「階級的図式」や「政治的課題についての觀念的論議」ばかりに執着する「インテリゲンツィア出身のマルクス主義者」だと書きたてているこのやり口をとくと意味されたい。これは、同じすぐれた革命的マルクス主義者たち、ほかならぬそのひとたちの指導をうけたおかげでどうにか曲りなりにも社会民主主義派の一員に加わることのできたその当のマルクス主義的指導者たちをとらえて、「セクト的精神、インテリの個人主義、イデオロギー的物神崇拜」にとりつかれた「社会主義的インテリゲンツィア」だときめつけ、「理論的定式や政治的スローガン」をつくったり「一般的な綱領的要求」をおしつけたりすることばかりやっていることをきわめて攻撃しているわがトロツキー先生のやり口と瓜二つである。つまり、わがトロツキー大先生は、ひとむかしまえの經濟主義者の論法をそのままとりいれ、非難中傷の言葉まで、無断でそっくり借用しているというしだいである！

この『クレード』にたいし、レーニンは、「このような見解にたいして断固として抗議し、ロシアの社会民主主義

派をそのすでにさだめた道、——すなわち、プロレタリアートの階級闘争と切りはなせないように結びつき、そして政治的自由の獲得を自身のもっともさし迫った任務とさだめた独自の労働者党をつくりあげるといふ道から外らせる危険にたいして、すべての同志諸君に警告を発することを、自分の義務とみなすものである」(前出、一五六—一五七ページ)という、明確な態度をまず表明し、ついで『クレード』の主張内容に検討をくわえ、それがすべて事実にする曲論から成り立っており、マルクス主義をゆがめ、社会民主主義派の基本的原則をねじまげるものであることを、あますところなく論証している。その要点をつぎに簡単に見ておこう。

(1) 西欧の労働運動の過去についての『クレード』の筆者たちの考えは、全く事実に反するものである。第一に、「西欧では労働者階級は政治的自由のための闘争や政治革命に参加しなかった」というのは、事実でない。チャーティズムの歴史、フランス、ドイツ、オーストリアの一八四八年の革命を見るがいい。第二に、「マルクス主義は、政治闘争が経済闘争に優越していた支配的実践の理論的表現であった」というのも、全く事実に反する。反対に「マルクス主義」は、非政治的社会主义(オーウェン主義、「フリーユ主義」、「真正社会主义」)が支配していたときに現われ、『共產党宣言』はいきなり非政治的社会主义に反対して進出したのである。マルクス主義が完全に理論的武装(『資本論』)をととのえて進出し有名な国際労働者協会を組織したときでさえ、政治闘争はまだけっして支配的実践とはなっていないかった(イギリスにおける狭隘な組合主義、ラテン系諸国における無政府主義とブルードン主義)。ドイツでラッサールの大きな歴史的功績は、労働者階級を、自由主義的ブルジョアジーの後尾であることから自立した政党に転化させたことにあった。マルクス主義こそは、労働者階級の経済闘争と政治闘争とを結合して一個のわがたい全体にしたものである。

(2) 西欧の労働運動とマルクス主義理論との現状についての主張も、まったく事実に反する。「マルクス主義の危機」

を書きたててゐるのは、社会主義者のあいだのどんな論争でも大げさに言いたてて社会主義党の分裂にまでもつていこうとするブルジョア三文文士のやり口の真似である。ベルンシュタイン主義は、マルクス主義理論をせばめ、革命的労働者党を改良党につくりかえようとする企てであつて、当然にも、ドイツの大多数の社会民主主義者から断固たる断罪をこうむつたのである。

(3) 西欧の労働者諸党の「実践活動の根本的変更」ということも、全然問題にならない。プロレタリアートの經濟闘争の巨大な意義およびその必要は、マルクス主義が当初から認め、強調しているところ、すでに一八六六年國際労働者協会第一回大会で「労働組合と經濟闘争との意義にかんする問題」が提起され、この大会の決議は、「經濟闘争の意義を正確に指示し、一方ではその意義の過大視にたいして、他方ではその意義の不十分な評価にたいして、社会主義者と労働者に警告をあたえ、また、労働組合を、資本主義の下で合則的なばかりか、必要な現象である」とみとめ、資本にたいする日常闘争に労働者階級を組織するため、また賃労働を廢絶するためにきわめて重要なものである」とみとめ、さらに、労働組合がその注意をもつばら『資本にたいする直接の闘争』にかぎつてはならないこと、労働者階級の一般的な政治的・社会的運動のそとに立つてはならないことを、労働組合の目標は、『狹隘な』ものであつてはならず、幾百万の被抑圧労働人民の全般的解放をめざしてつとめなければならないことを、みとめた」のである。

(4) 「ほかの反政府諸党にたいする労働者党の態度になにかの重大な変更をくわえるべきだ」という主張は、なおさら問題にならない。この点についても、すでにマルクス主義は、「政治の意義の過大視」や「陰謀主義（ブランキ主義、その他）」とも、「政治の輕視」や「政治を日和見主義的・改良主義的な社会的補強策に狭小化すること」とも一様に無縁の、正しい立場を示している。プロレタリアートは、独立の労働者政党の創設をめざして奮闘しなければならず、その党

の主要な目標は、社会主義社会を組織するためにプロレタリアートをして政治権力を奪取させることでなければならぬ。プロレタリアートは、他の諸階級や諸党をけつして「一団の反動的大衆」⁽⁶⁹⁾とみなしてはならず、まさにその反対に、政治的・社会的な生活全体に参加し、反動的な階級や党に反対して進歩的な階級や党を支持し、現存体制にたいするいっさいの革命運動を支持し、いっさいの被抑圧民族または人種、いっさいの迫害されている宗教、無権利な性、等々の擁護者とならなければならない。『クレード』の主張は、プロレタリアートの闘争の階級性をぼかし、革命的マルクス主義を狭小化して月なみの改良主義的潮流にかえようとするものでしかない。

(69) 「プロレタリアート以外の他の諸階級」を「一団の反動的大衆」とみなして、景気のいいプロレタリア社会主義革命論をぶつというのは、ほかならぬラッサールの垂流で大論説の筆者たるトロツキーのお家芸である。

(70) 「反動的な階級や党に反対して進歩的な階級や党を支持し、現存体制にたいするいっさいの革命運動を支持する」というのは、プロレタリアートの基本的原則として、このようにレーニンによって強調されている。ところで、こんにち、日本において、マルクス・レーニン主義党を僭称する「前衛」集団は、いったい、この基本的原則をただしく遵守しているであろうか？ 現存体制にたいするいっさいの革命運動、合法的運動のみならず非合法的運動をもすべて——だが、そもそも、合法的活動だけで、どうして現存体制を根本的にひっくりかえすことができるか！——真剣に、誠実に、これを支持しているであろうか？ それとも、自分たちの流儀にしたがわない集団の運動、現存体制の法律にひっかかるような運動は、「敵の弾圧を挑発するものだ」として、極力これを排撃し、攻撃を加えているであらうか？ 残念ながら、事實はすべて「排撃」、「攻撃」のみを示している。つまり、右の僭称集団は、うたがいもなく、プロレタリアート党の基本的原則に真っ向から背反するもの、まぎれもない反レーニン主義的修正主義集団であることが、この一事によっても実証される。このようにして、この(4)におけるレーニンの確言は、一方でのトロツキーおよびその垂流と、他方での「日共修正主義集団」とが、その本質においてまったく同じもの、つまり、同じ日和見主義的、改良主義的徒党にほかならないこと、ただ、前者は「左」の見せかけを、後者は「右」の見せかけをとっているところがちがうだけだということを、的確に摘発するという、偉大な客観的意義をもっている。

るのである！

(5) 最後の「ロシア労働者階級はまだ政治的任務をにかけていない」という主張は、ロシアの革命運動にたいする完全な無知を立証するだけである。はやくも一八七八年に創立された「北ロシア労働者同盟」と一八七五年に創立された「南ロシア労働者同盟」とは、その綱領のうちに政治的自由の要求をにかけていたし、九〇年代にも労働者階級はこの同じ要求をたびたび出した。「独立の労働者政党についての論議は、他国の任務、他国の成果をわが国の土壌にうつしうえた産物でしかない」という主張は、ロシアの労働者階級の歴史的役割とロシアの社会民主主義派のもっとも緊要な任務とについての完全な無理解を立証するにすぎない。

要するに、『クレード』の筆者たち自身の綱領は、「労働者階級は『最小抵抗線にそつて』すすみながら經濟闘争をおこなうだけにとどめ、他方、『自由主義的な反政府分子』がマルクス主義者の『参加』のもとに『法治的諸形態』のために戦うべきだ」というのであつて、このような綱領の実現がロシアの社会民主主義派の政治的自殺に等しく、ロシアの労働運動およびロシアの革命運動に致命的打撃をあたえずにはおかないことは、まったくうたがいをいれない。レーニンは、「ロシアの社会民主主義者は、『クレード』に表現された思想の全範圍にたいして断固たる戦いを宣言しなければならぬ」(前出、一六〇ページ)と強調している。とはいへ、『クレード』は、その反面、まことに貴重な「価値」をもつていたのであつて、そのことは、レーニンのつぎの説明がこれを示している。

「合法的な批判と非合法的な經濟主義との結びつきと相互依存……………悪名高い『クレード』があのような至当な評判を得たのも、この結びつきを率直に定式化して、『經濟主義』の基本的な政治的傾向をしゃべったからであつた。それは、労働者は經濟闘争(組合主義的闘争)と言うほうがより正確であらう。というのは、組合主義的闘争に

は、それ特有の労働者政治もふくまれるから」をおこなえ、そしてマルクス主義的インテリゲンツィアは自由主義者に合流して政治「闘争」をおこなえ、ということである。「人民のなかでの」組合主義的活動はこの任務の前半を、合法的批判はその後半をはたすものであった。この声明は、経済主義とたたかううえでじつにすばらしい武器となったので、もし『クレード』が出なかつたら、それを発明するだけの値うちがあつたとおもわれるほどである」(『なにをなすべきか?』、前出、第五卷、三三六ページ)。

論文『ロシア社会民主主義派のうちの後退的傾向』は、『ラボーチャヤ・ムイスリ』紙の『別冊付録』(一九九九年九月)の主張『われわれの現実』(筆者はエル・エム)の詳細な検討・批判にあてられたものである。レーニンはまず「この論文の冒頭を読んだだけでわかることは、エル・エムが、一般に『われわれの現実』を、またとくにわが国の労働運動を、まったく事実、反して、えがいており、労働運動にたいする法外に狭い理解と、ロシアの社会民主主義者の指導のもとで労働運動がすでにつくりだした高度の諸形態にたいして眼を閉じようとする志向とを、あらわに示しているということである」(前出、第四卷、二三五—三三六ページ、傍点—レーニン)と述べて、以下、エル・エムの主張をひとつひとつとりあげてはこれに反駁を加えている。簡潔を期するため、われわれはエル・エムの主張のうちのめばしい論点を——箇条書きに——あげて、これについてのレーニンの批判内容を簡単に示すことにしよう。

(1) 「わが国の労働運動は、罷業団から合法的協会にいたるまで、きわめて多種多様な組織形態の萌芽をもっている」、「[「瞬間における運動の任務、ロシア労働者の本当の労働者の事業は、労働者が可能なあらゆる方法によって、自分の状態を改善すること」]に帰着する。その方法として挙げられるのは、ストライキと合法的協会だけである」(エル・エム)——これは、まっかなうそである! ロシアの労働運動は、もつと高度の、ずつと進歩した組織形態をつくりだし、もつと広範な任務をす

に提出している。ペテルブルグその他の「闘争同盟」を見るがいい。ロシア社会民主労働党の創立は、ロシアの労働運動がみごとにロシアの革命運動と融合していることを示している。

(71) トロツキーが例の大論説の中で、「無党の労働者組織」への「持続的な結晶化」、つまり、「労働組合、労働者クラブ、地方自治行政」等々の「プロレタリア的団体」への結集をくりかえし力説している(Ⅲの②・⑤および⑩、Ⅳの②、⑤および⑨)のは、このエル・エムとまったく同じ見解に立っていることを示すものである。

(2) 「われわれの運動の傾向を示すもっとも特徴的な指標となるものは、もちろん、労働者の提示する諸要求である。」(エル・エム)——いったい、どういうわけで、社会民主主義者および社会民主主義的諸組織の諸要求は、われわれの運動の指標のうちに加えられないのか？ どういう根拠で、彼は、労働者の諸要求をロシアの社会民主主義者の諸要求から区別するのか？ これは、社会主義およびロシアの革命運動にたいするロシアの労働運動の関係を、ロシアの労働者階級の政治的任務をも、全然理解していないことを示すものではないか。西欧でもどこでも、労働運動が社会主義から切りはなされていることが、その両方の弱体と未発達を規定したのである。社会主義と労働運動とが単一の社会民主主義運動に融合されるようになったとき、はじめて、労働者の階級闘争は、有産階級による搾取から自己を解放しようとするプロレタリアートの意識的な闘争に転化し、社会主義的労働運動の最高の形態である独立した労働者的社会民主党が作りだされるのである。まさに社会主義を労働運動との融合に向わせたことが、マルクス・エンゲルスの主要な功績である。彼らは、この融合の必要なことを説明し、プロレタリアートの階級闘争の組織化を社会主義者の任務として提起する革命的理論をつくりだした。ロシアでも、はじめ労働者組織と社会主義者とはばらばらであったが、前進し、マルクスの理論をうけいれ、ロシアに適用して労働者社会主義の理論、ロシア社会民主主義者の理

論をつくりあげた。ロシア社会民主主義派を創始したのは、「労働解放」団、ブレハーノフやアクセリロードやその友人たちの主要な功績である。「ロシア社会民主労働党」の創立は、労働運動と社会民主主義との融合への途上の最大の一步を示す。現在では、すべてのロシアの社会主義者とすべての自覚したロシアの労働者の主要な任務は、この融合をうちかため、「労働者の社会民主党」を強化し、組織化することである。この融合がわけわからず、両者の間になんらかの分界線を引こうとつとめる者は、ロシアにおける労働者社会主義と労働運動との事業に害悪をもたらし、これを破壊するものである。

(72) トロツキーが、「プロレタリアートの階級運動へのマルクス主義的インテリゲンツィアの適応」(Ⅰの⑧)とか、「労働運動の発展がもたらした新たな欲求のひとつといはずれも、ロシアにおいて、この欲求充足のための道具として役立ところのひとつの特別の分派を生みだした」(Ⅱの②)とか述べたてているのは、このエル・エムの精神に忠実にそったものである。

(3) 「広範な諸要求、政治的諸要求についていえば、ただ一八九七年のペテルブルグの織工の要求にだけ、われわれは、わが国の労働者がこの種の広範な政治的要求をかかげた最初の、しかもまだあまり意識的でない場合をみるのである。」(エル・エム)——これは絶対に事実に反する。これによって『ラボーチャ・ムイスリ』の編集者は、第一に、社会民主主義者として許しえないロシア革命運動および労働運動の歴史の忘却をさらけだし、第二に、労働者の事業にたいする許しえないほど狭い理解を示している。広範な政治的諸要求は、一八九八年ペテルブルグ「闘争同盟」のメーデーのリーフレットにも、新聞『サンクト・ペテルブルグスキー・ラボーチー・リストーク』のなかにも、また「ロシア社会民主労働党」の正式機関紙とみとめられた『ラボーチャ・ガゼータ』のなかにも、ロシアの労働者によってかかげられている。同紙がこれを無視するのは、まさしく後退であり、それ自身、先進的労働者の代表者でなく、低い未発達の諸層

の代表者であるという事実を裏書きしている。先進的労働者こそ、労働者の事業に奉仕する心構えと能力をもっていることを労働者大衆にむかつて実証し、大衆の完全な信頼を勝ちえたのであって、これによって、大衆は彼らのあとについていったのである。これらの先進的労働者はまさに社会民主主義者であった。先進的労働者と社会民主主義的諸組織との融合は全く自然であり、不可避であつたが、それは労働者階級のあいだの自然発生的な民衆運動と、マルクス・エンゲルスの理論——社会民主主義派の学説にむかつてすすんだ社会思想の運動という、二つの深刻な社会運動があい遭遇したという、巨大な歴史的事実の結果であつたといわなければならない。

(4) 「このような政治闘争を労働者がまったく意識的に、自主的におこなうようになるためには、その政治闘争が労働者諸組織自身によっておこなわれること、労働者のこうした政治的諸要求が、労働者によって意識された現瞬間における彼らの共通的政治的必要と利益とに立脚したものであること、それらの要求が労働者の（同職組合的）諸組織自身の要求であること、それらの要求がこういう労働者諸組織によって共同で作成され、また同様にこれらの労働者組織によってそれ自身のイニシアチブにもとづいて共同で提出されたものであることが、必要である。」（エル・エム）——このように政治を個々の改良のための同職組合の闘争に帰着させることは、政治の否定ではないか？ これは、社会民主主義者は、プロレタリアートによる政治権力の獲得と社会主義社会建設のための手段としての民主主義獲得のためにたたかう独立の労働者政党へプロレタリアートの階級闘争を組織することを目標としてつとめなければならない、という、世界社会民主主義派のもっとも根本的な遺訓を放棄するものである。西欧の社会主義と西欧の民主主義との長年の経験が独立した労働者政党の結成のためにはたたかう必要を教えているということ、ロシアの革命運動の歴史が、長い困難な道を通じてやっと社会主義と労働運動との結合、偉大な社会的・政治的理想とプロレタリアートの階級闘争との結合をつくりあげたということ、ロ

シアの先進的労働者がすでに社会民主労働党の基礎をおいたということ——これらのことは彼らの目にも耳にも入らない。とくに許せないのは、彼らが、ロシア・プロレタリアートの偉大な政治的任務を完全におしのけて、「現瞬間の利益」だけに局限しようとしていることである。専制の打倒のための闘争をおこないうるのは革命党だけだということ、ロシアの労働運動はずっと前から自身を革命的に組織することをめざしてつとめており、またこの志向を事実で証明したということを、ロシアの先進的な労働者はよく知っている。なぜエル・エムは、専制にたいする系統的な宣伝・煽動を組織する任務を、ロシアの労働運動の当面の任務の一つにあげないのか？ それはただ、彼がロシアの労働運動とロシアの社会民主主義派との諸任務に堪んして、まったくばやけた観念しかもっていないからである。

なお、レーニンは、名著『なにをなすべきか？』のなかで「自然発生的な労働運動はそれだけでは、組合主義しか生みだせない（また不可避免的にそれしか生みださない）が、労働者階級の組合主義的政治は、ほかならぬ労働者階級のブルジョア的政治である。労働者階級が政治闘争に参加しても、それどころか政治革命に参加してさえ、それだけではまだ労働者階級政治はけっして社会民主主義的政治にはならない」（全集第四版、第五卷、四〇七ページ）と強調している。

(5) 「わが国の革命家たちは、労働者の運動を専制打倒のための最良の手段とみなしている。自分たちの『労働解放』の綱領を、『専制との闘争のための勢力をどこから得てくるべきか？』という質問にたいする回答としかみないようなわれわれの同志たちを、われわれは理解しまいとする心がまえてゐる。」（エル・エム）——「労働解放」団が一八八五年に出したロシア社会民主主義者の綱領草案では、資本の圧制からの労働の完全な解放、いっさいの生産手段の社会的所有への転化、労働者階級による政治権力の奪取、革命的労働者党の結成が、その基礎におかれている。エル・エムはこの綱領を曲解し、

故意にゆがめている。彼は、右の綱領草案につけて出したアクセリロードの論文の中の、「この綱領は、専制との闘争のための勢力をどこから得てくるべきか？　という質問にたいする回答であつた」というたったひとつの言葉にしがみついている。しかし、右の綱領がロシアの革命家たちのこの質問、ロシアの革命運動全体のこの質問にたいする回答でもあつたということ——これは、歴史的事実ではないか。綱領がこの質問に回答をあたえたとすれば、それだけで、労働運動は「労働解放」団にとって一つの手段にすぎなかつたということになるというのか！？　彼のこの「無理理解」は、「労働解放」団の活動における周知の諸事実にたいする無知を立証するだけである。また彼には、どのようにして「専制の打倒」が労働者サークルの任務となりうるのが、すこしもわからない。「労働解放」団の綱領をよく見るがいい、——「ロシアの社会民主主義者は、労働者階級のあいだで煽動し、彼らのあいだに社会主義思想と革命的諸組織とをさらにいっそう普及させることを、絶対主義にたいする労働者サークルの政治闘争の主要な手段と考える。これらの諸組織がたがい緊密に結びついて、整然たる全一体となるなら、それらの組織は、政府との部分的な衝突に満足せず、好機いたれば、躊躇なく政府にたいする果敢な総攻撃にうつるであろう。」一八九八年春「ロシア社会民主労働党」を創立したロシアの諸組織は、まさにこの戦術にしたがつたもので、このような組織がロシアでは巨大な政治勢力であることを実証したのである。

(6) 「ロシアの多くの住民層が政府にたいしてやっている合法的な反政府運動はすべて、ゼムストヴォや都市の公共的自治のための闘争も、公立学校のための闘争も、飢えた住民への公共扶助、等々のための闘争も、みな専制との闘争ではないか。ところが、この社会的闘争は、なにか奇妙な誤解のために、ロシアの多くの革命的著作家たちの好意ある注目をひかなかつた。だが、われわれにとっての主要な問題は、わが国の労働者が、専制とのこの社会的闘争をどのようにしておこなうべきか、ということである。」

(エル・エム)——これは、混乱と誤謬と歪曲とのごった煮である。

第一に、エル・エムは、合法的な反政府運動を専制反対の闘争、専制打倒のための闘争と混同している。そしてこの低劣な混同を、「専制との闘争」というアイマイな言葉でごまかそうとしている。この言葉は、専制に反対する闘争を意味するものでもありうるが、しかし、多くの場合、むしろ専制の体制を基盤としての、専制の個々の方策に反対する闘争を意味するものでもありうる。これら二つは、まったくちがった闘争である。ロシアの自由主義者は、専制自身から許されており、専制にとって危険でないと認められているような形で、専制にたいする不満を表明しているだけである。自由主義的反政府運動の最大の現われは、人民の行政参加を要求して自由主義者がツァーリ政府にたいしておこなった請願にすぎない。これにたいする警察の乱暴な拒絶、憲兵の政府の無法で野蛮な迫害をも、かれらは、がまんよく辛抱した。かれらが、資金も在外代表者もいつでも自由に調達できたにもかかわらず、専制の打倒をめざす闘争のための党をかつて組織したことはない。また政府にたいする公式の要求などを提出したこともないのである。

(73) トロツキーが「あるべき党」の闘争について説明して、「闘争の進行そのものを通じて——(つまり、成り行きにしたがつて——山本)——合法的活動と非合法的活動との結合が、国会演壇と革命的パンフレット(?!——山本)の利用が、必要」(Ⅳの⑧)といっているのは、彼の立場が完全にエル・エムのそれと一致していることをうたがう余地なく示している。

第二に、エル・エムは、合法的な反政府運動をふくめた「この社会的闘争」をロシアの労働者がしなければならぬといいつて、専制に反対する革命的闘争ではなく、専制にたいする合法的反政府運動をやるべきだということにおちこむ。つまり、社会民主主義をまったく卑俗化して、それをありふれた、みじめなロシア自由主義と混同するところまで落ちこんでいく。「われわれ」ロシア社会民主主義派の「主要な問題」は、ロシアにおけるいっさいの反政府分

子の支持に立脚することのできるような、また反政府運動のすべての現われを自分の革命闘争に利用することのできるような、絶対主義打倒のために闘争する革命的労働者党を、どのようにして組織すべきか、という点にこそある。『ラボーチャ・ムィスリ』の編集者たちは、實質上、社会民主主義派に完全に背反し、合法的な反政府運動をやっている自由主義者の方にむかつてすんでいる。労働者の「社会的自主活動」の理論や、「社会的相互扶助」の理論や、「いまのところ」一〇時間労働日のことだけやっている同職組合の理論や、ゼムストヴォ、自由主義的協会、その他の専制との「社会的闘争」の理論——こうした理論のなかに、社会主義的なものがひとつでもあるか、また自由主義者から承認されないようなものがひとつでもあるか？ つまり、連中は、實質的には、ロシアの労働者をその未発達と細分状態のままに放っておき、かれらを自由主義者の尻尾にかえようという傾向をもっているのである。

(7) 「社会民主主義者たちの綱領を読んで驚かされるのは、工場主たちの立法議會や、工場問題審議會や、都市の公共的自治に労働者が参加することの重要性を、まったく無視していることである。」⁽⁷⁴⁾（エル・エム）——都市の自治行政における社会主義的労働者の活動の利益と重要性とを否定した社会民主主義者はひとりもない。だが、ロシアでこのことを語るのは笑止の沙汰である。ロシアでは、社会主義のどんな公然たる現われも不可能であり、ここで労働者を都市の自治行政に熱中させるといふことは、事實上、先進的労働者を社会主義的な労働者の事業からひきはなして自由主義へそらせることを意味する。

(74) トロツキーが、「党組織」について、「その完全な広がりにおける階級的任務」という言葉に、わざわざ、「団結の自由のための闘争、国会内における社会立法の諸問題、種々の會議の席上での労働者代表とブルジョアの政論家との衝突」（Ⅳの③）と説明をつけているのは、まさに語るに落つる部類である。この説明は、エル・エムの精神をもっともよく体现したものだといつてよい。

(8) 「どういふ闘争を労働者がおこなうことがのぞましいか？ おこないうる闘争こそそのぞましく、そして、労働者が現瞬間におこなっている闘争こそ、おこないうる闘争である。」(エル・エム) —— 流行の「ベルンシュタイン主義」に心酔した『ラボーチャヤ・ムイスリ』の編集者たちが感染している無意味で無原則的な日和見主義を、これ以上の確にいいあらわすことはできない。おこないうるものがのぞましく、そして現瞬間に存在するものがおこないうるものである!! これは、数えきれないほど多くの障害物と敵とが待ちもっている遠い困難な旅路にたとうとしている人にむかつて、どこへ行くべきかという問いに答えて、行けるところへ行くのがのぞましく、そして現瞬間に君が行こうとしているところこそ行けるところだ、というのと同じである! それは、まさにニヒリズム、しかも革命的ニヒリズムではなくて、無政府主義者やブルジョア自由主義者が發揮する日和見主義的ニヒリズムである。ロシアの労働者にむかつて、「部分的な政治闘争」つまり「全労働者の状態の改善のための闘争」を呼びかけるのは、ロシアの労働運動と社会民主主義派にむかつてあからさまに、一歩、後退を呼びかけるもの、労働者にむかつて、社会民主主義者から分離し、したがってヨーロッパとロシアの経験のいっさいの成果をみな投げ捨てるように呼びかけることである。そして、全運動を「現瞬間の利益」に帰着させるといふことは、労働者の未発達をあてこみ、彼らのもっとも劣等な欲情の道具となることを意味する。

(9) 「労働者社会主義とは、生産を労働者の社会的管理のもとにうつすこと、ありとあらゆる工場問題の考究のための審議会や、調停裁判所や、労働法のためのあらゆる会議、委員会、協議会への労働者の活潑な参加を通じて、また、公共的自治行政や、最後に、国の全般的代議機関への労働者の参加を通じて民主化された、公的権力の管理のもとにうつすことである。」(エル・エム)⁽⁷⁵⁾
——『ラボーチャヤ・ムイスリ』の編集者たちは革命的方法をおしのけ、平和的方法によって達成できるものだけを

労働者社会主義だとしている。これは社会主義をせばめ、それを月並みなブルジョア自由主義に帰着させるものである。労働者階級はどちらがよいかといえば、もちろん平和的に権力を掌握するほうをえらぶであろうが、プロレタリアートの側から権力の革命的奪取を断念することは、理論的にみても実践的・政治的にみても、まったく無分別であり、ブルジョアジーとすべての有産階級にたいする恥ずべき譲歩を意味するだけである。ブルジョアジーが、プロレタリアートにたいして平和的に譲歩せず、決定的な瞬間に強力をもって自分の特権をあくまで守る挙に出るということは、もつともありそうなこと、いや、一個の法則でさえある。そのばあい労働者階級にとっては、革命以外に自分の目的を実現する他の道は残されていない。だからプロレタリアートの行動をせひともただ一つ平和的な民主主義化にかぎるということは、⁽⁷⁶⁾労働者社会主義の概念をまったく勝手気ままにせばめ、卑俗化し、歪曲するものでしかない。

(75) トロツキは、「社会民主主義的労働者」が「自然に（!?——山本）労働組合や労働者クラブのもつとも影響力をもった成員になつていたので、そのことがプロレタリア運動の社会主義的進行にとって十分な保証と思われた」と述べて、これらの労働者が「あるべき党」の中核を形づくる「新しいタイプの社会民主主義者」だと主張している（Ⅳの⑧）。これは、エル・エムの主張と完全に符合するものである。

(76) フルシチョフから授かった「現段階の特別の諸条件」という薬味をそえて、あいもかわらずこの「平和革命」ひとつをけんめいに売りさばいているのは、ご存じ「日共修正主義集団」である。どんなことがあるうとも「合法」の枠をこえず、こえたものには非難と罵倒をあびせ、もっぱら「合法的な反政府闘争」ばかり盛大にやり、「国民」の利益と幸福のために「献身」しているこの「修正主義集団」は、看板こそちがえ、エル・エムたちとその立場・主張から実践まで、完全に一致しているものであり、典型的な経済主義的日和見主義集団である。つまり、わが「日共修正主義集団」は、そのけんめいの「トロツキスト」攻撃にもかかわらず、残念ながら（!?）本質的には、わがトロツキー大先生およびその和製エビゴーネンどもと緊密な

「同志」関係にあるものというわけである！

（一）で、この論文の末尾を飾るレーニンの結びの言葉を、かかげておこう。

「ロシア社会民主主義派は、その創始者である「労働解放」団の団員としても、「ロシア社会民主労働党」を創立したロシアの社会民主主義的諸組織としても、つねにつきの二つの基本的命題を承認してきた。（一）社会民主主義の本質は、政治権力を戦いとり、すべての生産手段を全社会の手にひきわたし、資本主義経済を社会主義経済でおきかえることを目的として、プロレタリアートの階級闘争を組織することである。（二）ロシア社会民主主義派の任務は、専制の打倒と政治的自由の獲得とを当面の目標とするロシアの革命的労働者党を組織することである。これらの基本的命題（それは、「労働解放」団の綱領のなかに正確に定式化され、『ロシア社会民主労働党宣言』のうちにいいあらわされている）に背反するものは、社会民主主義に背反するものである」（前出、二六二ページ、傍点—山本）。

さらに、経済主義にたいするレーニンの闘争は、レーニン自身によって創立された最初の全国的なマルクス主義的非法新聞『イスクラ』を拠点として精力的に継続されたのであるが、『イスクラ』にとって経済主義との闘争がどんなに決定的な意義をもつ課題となっていたかということを示すために、その創刊（一九〇〇年九月）にさきだって、『イスクラ』発行の意図、目的および任務を宣明するために発表した『「イスクラ」編集局の声明』の中から、当面関係ある個所を二つだけ引用しておこう。

「すでに述べたように、ロシア社会民主主義者の思想的統合はまだこれからつくりあげなければならないのであるが、そのためには、われわれの考えでは、こんにちの「経済主義者」やベルンシュタイン主義者や、「批評家」がもちだしている原則上ならびに戦術上の基本的諸問題を、公然と全面的に討議することが必要である。統合するまえに、ま

た統合するために、われわれはまず決定的にまた明確に、分界線を書さなければならない。そうしないならば、われわれの統合は、現在ある混乱をおおいかくし、その徹底的な除去を妨げる架空のものにすぎないであろう。だから、われわれがわれわれの機関紙を多様な見解のたんなる集合場にするつもりでないことは、いうまでもない。反対に、われわれは嚴格に特定の傾向の精神において機関紙を運営するであろう。この傾向はマルクス主義という言葉で表現することができる。そしてわれわれが、マルクスとエンゲルスの思想を首尾一貫して發展させることを主張し、E・ベルンシュタイン、ペ・ストルツェ、その他多くの人のおかげでこんにちまんと大流行になりお世話中途半端で散漫な日和見主義的修正を断固として排撃するということは、いまさらつけくわえるまでもないであろう。しかし、われわれは、あらゆる問題を自分たちの特定の見地から検討しながらも、けっして、われわれの機関紙の紙上で同志のあいだに論戦がおこなわれることを拒否するものではない。……………われわれは、明らかに食いちがっている見解のあいだに公然たる論戦が欠けていること、きわめて重大な問題にかんする意見の相違をおしく、そうとする志向のあることを、現在の運動の欠陥の一つとさえ考えている」(前出、第四卷、三二九—三三〇ページ、傍点およびゴシツク体—山本)。

「社会民主主義派をもつぱらプロレタリアートの自然發生的闘争に奉仕する組織と理解する人々は、地方的煽動や「純労働者向け」文書だけで満足するかもしれない。われわれは、社会民主主義派をそういうふうには理解しない。われわれはそれを、労働運動と切りはなせないように結びついた、絶対主義に反対する革命的政党と理解する。このような党に組織されたプロレタリアート、この現代ロシアのもつとも革命的な階級だけが、自己に課せられた歴史的任務——その旗のもとに国内のいっさいの民主主義的分子を統合し、たおれた幾世代の人々の頑強な闘争を、憎むべ

き制度にたいする最後の勝利をもって完了する任務——をはたすことができるであらう」(前出、三三一ページ、傍点—山本)。

レーニンの経済主義にたいする批判および闘争(一九〇〇年末までの)のあらましは、およそ以上のとおりである。ロシア社会民主労働党の基本的原則にそって綱領を確立するためにけんめいの努力を傾けてきたレーニンが、同じ基本的原則を遵守し宣明せんがために、これをふみにじる経済主義の潮流とどんなに徹底的にたたかったかは、これだけでも明白である。

では、トロツキーは、『ロシア社会民主主義派の発展諸傾向』を説明した大論説の中で、経済主義にたいして、どんな評価をし、これとどうたたかっているかといえは、なんと、つぎの箇所(Ⅱの①)がその全部なのである。

「労働運動の発展がもたらした新たな欲求のひとつといはずれも、ロシアにおいて、この欲求の充足のための道具として役立つところのひとつの特別な分派フランクシヨを生み出したが、この分派はまた同時に、マルクス主義的に思考するインテリゲンツィアが労働運動に適応する表示形態として役立ったものである。そして、この分派はまたそれとして、その独自の金労働運動の哲学を創り出したのである。「経済主義」は、産業躍進の時期に生まれたひとつの経済的闘争の地盤の上に成立したものであり、そのさい自身にとって生じた課題をば、政治は完全にかまたはできるかぎり大幅に運動から排除されるべきだというように把握したのである。のちになって、経済的危機がおこり、国内で政治生活が活潑になったときには、「政治家」はまたそれとして、経済主義者(組合主義者)を一人のこらず駆逐するために、それを利用した。だが、その後すぐに、かれらは二つの路線に、すなわちメンシェヴィキとボリシェヴィキの路線に分裂した」。

読者諸君、こここのくだりをどうかとくと読んで、これをさきあげた経済主義にかんするレーニンの説明とよく見

くらべていただきたい。いったい、ここにあるのは、なにか？　ここにあるのは、經濟主義の説明か？　とんでもない。ここにあるのは、現実の經濟主義とはさらさら関係のないもの、ただ言葉をひねってでっちあげた架空の、でたための「經濟主義」であり、しかも、ロシアの眞実のマルクス主義的指導者、眞の社会民主主義者をめあてに下劣な中傷をあびせ、こねあげたでっちあげで事実を歪めようとする陰險きわまりないつくり話である。

第一に、社会民主主義的組織である「分派」^{フракシヨ}を「労働運動が生み出した新たな欲求充足のための道具」と呼んでいるのは、トロツキー自身「自然発生性への拝跪」の完全な信奉者であることを、端的に示すものである。また「マルクス主義的に思考するインテリゲンツィアの労働運動に適応する表示形態」というのも、眞の社会民主主義者および「労働者インテリゲンツィア」を自分と同じ經濟主義者の水準にひきおろすものであつて、きわめて下劣な中傷である。

第二に、「經濟主義」は、「労働運動の哲学」などではけつしてない。この言葉は、トロツキー自身の中にある、労働運動をブルジョア自由主義者の後尾におとそうとする、卑俗な、物欲にとらわれた小ブル的傾向をあらわしているだけである。

第三に、經濟主義が「産業躍進の時期に、經濟的闘争の地盤の上に成立したものだ」というのは、あきらかにまったくのたわごとである。

第四に、それが「政治は大幅に運動から排除されるべきだというように把握した」というのも、眞つ赤なウソである。それはまさに、革命的労働運動を組合主義政治の上にもつていき、政治的に労働者をブルジョア自由主義派の尻尾に仕立てようとしたものである。

第五に、「經濟的危機がおき、政治生活が活潑になったので、それを利用して「政治家」が經濟主義者を驅逐しようとした」と

は、いったい、どういうことか？ トロツキーは、いったい、「労働解放」団を創立した社会民主主義派の先達たちと「在外ロシア社会民主主義者同盟」を乗とった経済主義者たちとの激烈な理論的・政治的闘争について、ちっとも聞いたことがないというのか？ いったい、トロツキーは、自分の「同志」マルティノフが、『イスクラ』の創始者レーニンとたえず闘争をしてきたということを、ちっとも知らないのか？ これらの闘争を、「政治家」と「経済主義者」との勢力争いとしてドイツの勤労大衆の前に描きだすとは、なんと度しがたく下劣な根性であろうか！

第六に、「政治家」が「メンシェヴィキとボリシェヴィキとに分裂した」というのも、真つ赤なウソであり、しかもきわめて陰險なで、つちあげである。いったい、トロツキーは、自分の「同志」マルティノフなる人物について、なんにも知らないとしら、をきろうというのか？

彼マルティノフは、プレハーノフたちを追い出して『在外ロシア社会民主主義者同盟』を経済主義者で占領したときの「指揮官」であり、しかも、ロシア社会民主労働党第二回大会の席上、レーニンに敵対して「メンシェヴィキ派」をひきまわした当の「総指揮官」マルトフの親密な戦友の一人であり、わがトロツキーはこの「総指揮官」の陣営に——レーニンに後足で砂をひっかけて——いちはやく駆けこんだものではないか！ 経済主義者こそが「メンシェヴィキ」を形づくったのであり、経済主義者と終始一貫たたかって、ロシア社会民主主義派の基本的原則を守りとおした革命的マルクス主義者こそが「ボリシェヴィキ」を形成したのだ。それにしても、経済主義者を「駆逐」した「政治家」から「メンシェヴィキ」が生れたとは、またなんと図々しくも見えすいたウソを書きたてることができたものであろうか！

トロツキーが『わが生涯』のなかで、一九〇二年に「ヨーロッパでマルクス主義の新聞『イスクラ』が創刊されたことを
経済と政治との関連の問題（五）

知った。それは、鉄の行動規律でたがいにかたく結びつけられた職業的革命家の中央集権化された組織をつくることを目的としていた。ジュネーヴで発行されたレーニンの本『なにをなすべきか？』もとどいたが、これも、もっぱら同じ問題をとりあつたものであった。」と書き、またシベリアを脱走してから「サマラでわたしは——いわば公式に——イスクラ組織に、ペロの名前で加入した」と記していることは、すでに引用したところである。『イスクラ』組織に正式に加入した「革命家」で、『イスクラ』編集局の声明の趣旨をちつともわきまえていないような手合が、ひとりでもあるだろうか？ また『なにをなすべきか？』を読んだほどの「社会民主主義者」で、その「序文」の中の「ロシア社会民主主義派内の二つの傾向の根本的対立」および「われわれと經濟主義者との決定的決裂」という明確な文字がその眼に入らない者があるだろうか？ またその五つの章のうち、第一章から第四章まで、それらの表題そのものがことごとく社会民主主義革命的マルクス主義と經濟主義Ⅱ日和見主義とのもつとも主要な本質的対立点を明示したものだということが、ちつともわからないような革命家が、ひとりでもあるだろうか？ さらに、その本文の相当部分が經濟主義者の「旗頭」で一九〇三年にトロツキーの「同志」となった「革命家」マルトイノフの徹底的批判にあてられたものだということだが、まったくその頭に入らないというような「革命家」が、いったい、ありうるだろうか？ この名著の「結論」は「經濟主義Ⅱ日和見主義の潮流ののさばる第三期をできるだけやく清算しよう」という真剣な呼びかけにあてられているのであるが、この本を読んで、この呼びかけがちつとも頭に残らないというような頭腦の持主が、いったい、「革命家」のなかに、ひとりでもありうるだろうか？ レーニンの『なにをなすべきか？』を読み、『イスクラ』組織に入つてはじめて社会民主主義的運動に加わつた男が、『イスクラ』の基本的立場も『なにをなすべきか？』の根本趣旨をもきれいさっぱり放り出して、一、二年のうちにたちまち、当の經濟主義者の「親方」のふところにとびこ

んで「メンシェヴィキ」の一員になってみたり、七、八年後には、「経済主義」と「政治家」との抗争を「マルクス主義的インテリゲンツィアの労働運動への適応形態」に結びつけた「哲学」の抗争だと言いたて、さらに「政治家」が「ポリシェヴィキ」と「メンシェヴィキ」に分裂してたがいによりあったと書き立て、さて、彼自身が労働運動と党のあり方を説明する段になると、真正銘の経済主義的主張を並べ、解党主義的主張を書きつらねて、これこそ真の社会民主主義派のあり方だと大いに力説している。いったい、こんな男の言っていることのうちに、ひとつとして真実にふれたものがあるだろうか？ ウソとでっちあげと中傷と誹謗とのほかに、なにがあるというのか？ 彼トロツキーの文章と実際の行動をちよつとでもつきあわせてみれば、誰の目にもつぎのような動かすことのできない真実がありありと映ってくる。——それは、マルクス主義も知らなければ人間解放に挺身する真実の革命家の誠意も情熱ももちあわさない、無能の俗物で、政治的野心ばかり旺盛な男が、革命家の間を泳ぎまわり、マルクス主義的文句と口調を真似て、ありとあらゆるウソ、ペテン、中傷、追従、恫喝、デマ、けし、かけを弄し、なんとかして「指導者」の地位にありつこうと、むなしくも苦心慘憺をかさねているという真相である。

(一九七一・一〇・一三)